

●東京エトランゼ Vol.3

TOKYO étranger



日本に暮らし、日本の文化や伝統に触れたフランス人をシリーズで紹介する「東京エトランゼ」。外国人だからこそ見えてくる日本の魅力、ここに再発見!

パリジェンヌは、着物が好き。



「着物は着ること自体が楽しいばかりか、出かける場を広げてくれたり、そこから新しい出会いが生まれたり……。それに着物を着ていると、いつもよりレディファーストに扱ってもらえますよ(笑)」。明るく茶目っ気たっぷりのマニグリエ真矢さんは、着物に触せられた「東京エトランゼ」。月と雁をモチーフにしたシックな浴衣も似合いました。パリ大学で日本語と日本文化を学び、その後来日して21年になる。実際にその目で見た日本の印象はどだったのだろうか。「それまでのイメージとはちょっとギャップを感じましたが、伝統とモダンがいたるところに混在しているところが面白いと思います。たとえば着物もそのひとつ。先進国の中で、伝統衣装がいまも身近に残されているのは唯一日本だけでしょう。ただ着物はあくまでも服ですから、時代とともに変化してきています。だからこそ暮らしの中で生き続けてこられたのだと思います。私にとって着物はもう一人の自分を発見できるファッション。単期に止まっておくだけではもったいないと思います」。日仏の文化の架橋として多方面で活躍する真矢さんは、日本の素晴らしい伝統や習慣を、新しいスタイルとデザインで現代に発信したいという願いから、昨年自身のブランド「マヤゴノミ」を立ち上げた。その第一弾として、新感覚の「ココロづけ袋」(写真下)を発表。「気持ちや想いを言葉ではなく、袋いやカチンにしてさりげなく相手に伝える。着物にも、伝統的な習慣にも、そんな日本人の奥ゆかしさや食いついて、ふだんの生活に気軽に取り入れられたらもっと楽しくなるはず」。忘れかけていた日本人の心呼び覚まされる思いがした。

(取材:文 山岸史之)



AXA Agent News vol.15



フランスパリ生まれ、フランス政府海外教育顧問委員を務める、真矢さんに「ワシジンの着物はこれ」(ダイヤモンド社)。
 パーソナルブログ
<http://www.magnier.com/>
 「マヤゴノミ」は三越日本橋店にて発売中。また今年秋からOPTにて発売予定。直販ショップ DENDENshop
<http://donden.online-store.jp/>でも購入可能。
 お問い合わせ info@axa.com.jp

マヤゴノミシリーズの「ココロづけ袋」と「プチふくら」は10月28日から全国のロフトで発売されます。



「着物は着ること自体が楽しいばかりか、出かける場を広げてくれたり、そこから新しい出会いが生まれたり……。それに着物を着ていると、いつもよりレディファーストに扱ってもらえますよ(笑)」。明るく茶目っ気たっぷりのマニグリエ真矢さんは、着物に触せられた「東京エトランゼ」。月と雁をモチーフにしたシックな浴衣も似合いました。パリ大学で日本語と日本文化を学び、その後来日して21年になる。実際にその目で見た日本の印象はどだったのだろうか。「それまでのイメージとはちょっとギャップを感じましたが、伝統とモダンがいたるところに混在しているところが面白いと思います。たとえば着物もそのひとつ。先進国の中で、伝統衣装がいまも身近に残されているのは唯一日本だけでしょう。ただ着物はあくまでも服ですから、時代とともに変化してきています。だからこそ暮らしの中で生き続けてこられたのだと思います。私にとって着物はもう一人の自分を発見できるファッション。単期に止まっておくだけではもったいないと思います」。日仏の文化の架橋として多方面で活躍する真矢さんは、日本の素晴らしい伝統や習慣を、新しいスタイルとデザインで現代に発信したいという願いから、昨年自身のブランド「マヤゴノミ」を立ち上げた。その第一弾として、新感覚の「ココロづけ袋」(写真下)を発表。「気持ちや想いを言葉ではなく、袋いやカチンにしてさりげなく相手に伝える。着物にも、伝統的な習慣にも、そんな日本人の奥ゆかしさや食いついて、ふだんの生活に気軽に取り入れられたらもっと楽しくなるはず」。忘れかけていた日本人の心呼び覚まされる思いがした。

特集



「着物は着ること自体が楽しいばかりか、出かける場を広げてくれたり、そこから新しい出会いが生まれたり……。それに着物を着ていると、いつもよりレディファーストに扱ってもらえますよ(笑)」。明るく茶目っ気たっぷりのマニグリエ真矢さんは、着物に触せられた「東京エトランゼ」。月と雁をモチーフにしたシックな浴衣も似合いました。パリ大学で日本語と日本文化を学び、その後来日して21年になる。実際にその目で見た日本の印象はどだったのだろうか。「それまでのイメージとはちょっとギャップを感じましたが、伝統とモダンがいたるところに混在しているところが面白いと思います。たとえば着物もそのひとつ。先進国の中で、伝統衣装がいまも身近に残されているのは唯一日本だけでしょう。ただ着物はあくまでも服ですから、時代とともに変化してきています。だからこそ暮らしの中で生き続けてこられたのだと思います。私にとって着物はもう一人の自分を発見できるファッション。単期に止まっておくだけではもったいないと思います」。日仏の文化の架橋として多方面で活躍する真矢さんは、日本の素晴らしい伝統や習慣を、新しいスタイルとデザインで現代に発信したいという願いから、昨年自身のブランド「マヤゴノミ」を立ち上げた。その第一弾として、新感覚の「ココロづけ袋」(写真下)を発表。「気持ちや想いを言葉ではなく、袋いやカチンにしてさりげなく相手に伝える。着物にも、伝統的な習慣にも、そんな日本人の奥ゆかしさや食いついて、ふだんの生活に気軽に取り入れられたらもっと楽しくなるはず」。忘れかけていた日本人の心呼び覚まされる思いがした。

「着物は着ること自体が楽しいばかりか、出かける場を広げてくれたり、そこから新しい出会いが生まれたり……。それに着物を着ていると、いつもよりレディファーストに扱ってもらえますよ(笑)」。明るく茶目っ気たっぷりのマニグリエ真矢さんは、着物に触せられた「東京エトランゼ」。月と雁をモチーフにしたシックな浴衣も似合いました。パリ大学で日本語と日本文化を学び、その後来日して21年になる。実際にその目で見た日本の印象はどだったのだろうか。「それまでのイメージとはちょっとギャップを感じましたが、伝統とモダンがいたるところに混在しているところが面白いと思います。たとえば着物もそのひとつ。先進国の中で、伝統衣装がいまも身近に残されているのは唯一日本だけでしょう。ただ着物はあくまでも服ですから、時代とともに変化してきています。だからこそ暮らしの中で生き続けてこられたのだと思います。私にとって着物はもう一人の自分を発見できるファッション。単期に止まっておくだけではもったいないと思います」。日仏の文化の架橋として多方面で活躍する真矢さんは、日本の素晴らしい伝統や習慣を、新しいスタイルとデザインで現代に発信したいという願いから、昨年自身のブランド「マヤゴノミ」を立ち上げた。その第一弾として、新感覚の「ココロづけ袋」(写真下)を発表。「気持ちや想いを言葉ではなく、袋いやカチンにしてさりげなく相手に伝える。着物にも、伝統的な習慣にも、そんな日本人の奥ゆかしさや食いついて、ふだんの生活に気軽に取り入れられたらもっと楽しくなるはず」。忘れかけていた日本人の心呼び覚まされる思いがした。

特集 日本の伝統文化に新風を吹き込む外国人たち

特集

着物、鼓、心づけ袋等々、日常の中で日本の伝統文化を未来につなげる

マニグリエ真矢さん

デザインスタジオ「マヤゴノミ」の代表取締役社長であり、フランス政府海外教育顧問委員を務める、真矢さんに「ワシジンの着物はこれ」(ダイヤモンド社)。

「着物は着ること自体が楽しいばかりか、出かける場を広げてくれたり、そこから新しい出会いが生まれたり……。それに着物を着ていると、いつもよりレディファーストに扱ってもらえますよ(笑)」。明るく茶目っ気たっぷりのマニグリエ真矢さんは、着物に触せられた「東京エトランゼ」。月と雁をモチーフにしたシックな浴衣も似合いました。パリ大学で日本語と日本文化を学び、その後来日して21年になる。実際にその目で見た日本の印象はどだったのだろうか。「それまでのイメージとはちょっとギャップを感じましたが、伝統とモダンがいたるところに混在しているところが面白いと思います。たとえば着物もそのひとつ。先進国の中で、伝統衣装がいまも身近に残されているのは唯一日本だけでしょう。ただ着物はあくまでも服ですから、時代とともに変化してきています。だからこそ暮らしの中で生き続けてこられたのだと思います。私にとって着物はもう一人の自分を発見できるファッション。単期に止まっておくだけではもったいないと思います」。日仏の文化の架橋として多方面で活躍する真矢さんは、日本の素晴らしい伝統や習慣を、新しいスタイルとデザインで現代に発信したいという願いから、昨年自身のブランド「マヤゴノミ」を立ち上げた。その第一弾として、新感覚の「ココロづけ袋」(写真下)を発表。「気持ちや想いを言葉ではなく、袋いやカチンにしてさりげなく相手に伝える。着物にも、伝統的な習慣にも、そんな日本人の奥ゆかしさや食いついて、ふだんの生活に気軽に取り入れられたらもっと楽しくなるはず」。忘れかけていた日本人の心呼び覚まされる思いがした。

「着物は着ること自体が楽しいばかりか、出かける場を広げてくれたり、そこから新しい出会いが生まれたり……。それに着物を着ていると、いつもよりレディファーストに扱ってもらえますよ(笑)」。明るく茶目っ気たっぷりのマニグリエ真矢さんは、着物に触せられた「東京エトランゼ」。月と雁をモチーフにしたシックな浴衣も似合いました。パリ大学で日本語と日本文化を学び、その後来日して21年になる。実際にその目で見た日本の印象はどだったのだろうか。「それまでのイメージとはちょっとギャップを感じましたが、伝統とモダンがいたるところに混在しているところが面白いと思います。たとえば着物もそのひとつ。先進国の中で、伝統衣装がいまも身近に残されているのは唯一日本だけでしょう。ただ着物はあくまでも服ですから、時代とともに変化してきています。だからこそ暮らしの中で生き続けてこられたのだと思います。私にとって着物はもう一人の自分を発見できるファッション。単期に止まっておくだけではもったいないと思います」。日仏の文化の架橋として多方面で活躍する真矢さんは、日本の素晴らしい伝統や習慣を、新しいスタイルとデザインで現代に発信したいという願いから、昨年自身のブランド「マヤゴノミ」を立ち上げた。その第一弾として、新感覚の「ココロづけ袋」(写真下)を発表。「気持ちや想いを言葉ではなく、袋いやカチンにしてさりげなく相手に伝える。着物にも、伝統的な習慣にも、そんな日本人の奥ゆかしさや食いついて、ふだんの生活に気軽に取り入れられたらもっと楽しくなるはず」。忘れかけていた日本人の心呼び覚まされる思いがした。

